校長室だより～燦燦～ №１４

校長あいさつ

2019.11.28

学校の校長は、人前であいさつや話をする機会が多い。話が下手ではとてもとても務まらない。今まで小学校の校長として、そして高校の校長として話をする機会は何度もあったが、一度たりとも上手くいったことはない。毎回、ああすればよかった。これも言えばよかった。早口になってしまった。反省しきりである。

一番嫌なのは、誰も評価をしてくれないことである。だめならばだめと言ってもらったほうがよい。かといって誰も褒めない。いっそのこと、今日の校長の話の評価者は〇〇先生などと決めておこうかと思ったりする。しかし、先生方の迷惑になるので実行には移さない。

校長のあいさつや話で最もやりやすいのは「式辞」である。入学式、卒業式の式辞である。１１月２日に行った創立百周年記念式典での校長式辞などは最高である。すぐ脇に内堀県知事がいらした。こんなチャンスはもう二度とないだろう。式辞は、何よりも原稿を堂々と見ることができる。だから安心して話すことができる。毎回練習はしている。実際に時間を計り、分量を調節したりもする。話してみて言いにくいところは言葉を替えることもしている。「、」や「。」以外のどこで間を置くかも考えてある。ちょっとした笑いを取る必要もない。式辞が一番失敗のリスクが少ない。

校長のあいさつの中で一番好きな式辞だが、機が熟せばやってみたいことがある。それは原稿なしで式辞を行うことである。無謀である。でもやってみたい。原稿を手にしていないと、かえって格好がつかないかもしれない。原稿を作成し、すべて暗記して話すことになるかもしれない。あるいは、原稿など作成せずに、その場で考えながら話す方法もある。かなりのリスクである。正直怖い。それでもやってみたい。

今まで、原稿を作成し、それを読む。原稿を作成し、それを持たずに話す。原稿の形ではなく、キーワードのみをメモし話す。全くのノー原稿で話す。原稿を作成し、それを暗記して話す。いろいろ試した。どれもうまくいかなかった。これが一番という方法は未だにわからない。きっと人によって一番いい方法は違うのだと思う。いつ聞いてもあいさつがすばらしい方がいる。修行あるのみか。

４月から梁川高校の校長になり、一つだけ習得したことがある。それは緊張せずに話す術を手にしたことである。以前は、前もって話すことが決まっていると、それなりの準備をして臨んでいた。すると、緊張してしまう。かえって、いきなり話すことになって話した内容のほうがよかったということが多々あった。それが７月頃だっただろうか。「うまくやろうとするのはやめよう」と思ったときがあった。すると、適度な緊張感の中で今までよりもスムーズに話すことができた。そのときは、一度原稿は作成したが、それを手にしなかった。かといって暗記もしなかった。完璧ではないにせよ原稿の内容が頭に入っているので、それをもとに話すことができた。

その後も、何度か同様の方法をとってみた。原稿を作成する。それは手にしない。緊張しないで話す。今のところ、この方法が自分には合っていると思える。緊張をコントロールできるようになったのが大きい。１１月２日も、内堀県知事の視線を感じながらも、緊張をセーブして話すことができた。

考えてみた。なぜ緊張をコントロールできるようになったのか。それは梁川高校の生徒たちのおかげである。ここからが本題の予定だったが、紙面が尽きたため次号にバトンを渡すこととする。